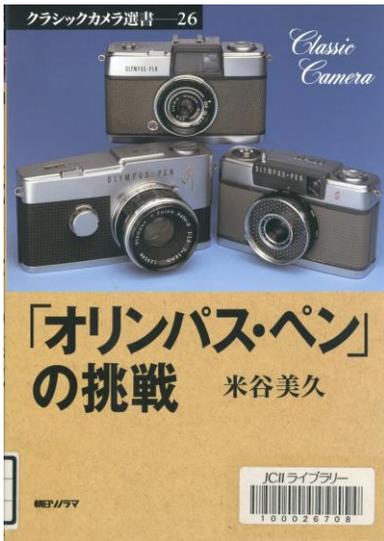


日本カメラ博物館 JCIH ライブラリー
学芸員 宮崎真二

まいたによしひさ

米谷美久 (1933-2009) は、現在の香川県観音寺市に生まれ、中学生のころから 16 ミリフィルムを使用する極小型カメラで撮影やカメラの分解組立を楽しんでいました。高校生になると地元の写真クラブへ加わり、ライカを使いながら撮影に対する姿勢や作品の見方などを学びました。そこでは 1950 年から『カメラ』誌上で開始された土門拳と木村伊兵衛の月例選評が話題の中心で、雑誌の届くのが待ち遠しかったと後年語っています。また、例会での作品を月例に投稿しており、『光画月刊』1951 年 9 月号に掲載されています。



『「オリンパス・ペン」の挑戦』

1952 年、米谷は早稲田大学工学部機械工学科へ進みました。同校では自動車工学を専攻し、写真は趣味に留めておくつもりでしたが、在学中にカメラの距離計連動などの特許を出願しました。内容評価を請うため、『写真工業』で「フィルム面の諸問題」を発表するなど、気鋭のカメラ設計者だったオリンパス光学工業の桜井栄一を訪ねて入社に至ります。

新人研修を終えた米谷に課された設計学習課題は「6,000 円で売れるカメラ」でした。これはやがて“ハーフサイズ”と呼ばれる 18×24 ミリの画面サイズを持った 35 ミリカメラ「ペン」として 1959 年に製品化されました。以降も米谷はペンの派生機種設計に携わります。技術専門誌の『写真工業』では、設計者自らが製品解説記事を執筆することが多く、米谷もペン EE (1961 年 7 月号)、ペン F (1963 年 4・11 月号)、ペン W (1964 年 12 月号)、ペン FT (1967 年 2 月号) を寄稿しています。



『一眼レフ戦争と OM の挑戦』

1970 年代に入ると、米谷が設計チーフとなった 35 ミリ一眼レフカメラ「M-1」(のちに OM-1 と改称) が誕生しました。ペンの時と同様に『写真工業』1972 年 10 月号には、米谷による解説記事が掲載され、以降も OM-2 (1976 年 4 月号)、OM-2N (1979 年 6 月号) と続きます。また 1979 年には、スライド式レンズバリアを採用したコンパクトカメラ「XA」を完成させ、同年 8 月号で解説しています。

1990 年代後半に入ると、自身の経験や半生を写真雑誌に寄せるようになりました。『カメラレビュー クラシックカメラ専科』40 号 (1996 年 12 月・朝日ソノラマ) には「カメラに夢を託して 小型化をコンセプトにした進化」が掲載され、1998 年 9 月の 48 号から「カメラ設計残酷物語」の連載が開始されています。

本連載は『「オリンパス・ペン」の挑戦』(2002 年)、『一眼レフ戦争と OM の挑戦 オリンパスカメラ開発物語』(2005 年) としてまとめられましたが、2007 年 6 月の同誌休刊に伴い、XA の話を主題とした 8 回分が書籍化されていません。